坂井秀吉

「住まい」と街で体感する近代化過程

「衣食足りて礼節を知る」という諺がある。これに〝住〟を加えて現代風に言い換えればベーシック・ヒューマン・ニーズ（ＢＨＮ）が満たされて社会の秩序・安寧が確保されるということである。今回の特集は「世界の住まい」ということであるから途上国のＢＨＮで最も基本的ニーズである「住まい」について語られる。その際、どのような視点から語られるのか興味深々である。筆者は一九八〇年代に延べ四年間（二年二回）、フィリピン大学経済学部での研究機会が与えられマニラに長期滞在した。そのおり見聞したフィリピンの「住まい」や街の変容からこの国の近代化過程に思いを馳せることにした。

一九六〇年代から一九九〇年代の東アジア諸国の成長パフォーマンスの評価が世界銀行によって行われ、日本、韓国、台湾、香港、シンガポール、タイ、マレーシア、インドネシアが東アジア高パフォーマンス（ＨＰＡＥｓ）として取り上げられ、そのパフォーマンスは「東アジアの奇跡」と呼ばれた。奇跡の具体的内容は、高度経済成長と所得不平等の縮小との同時達成である。フィリピンは「東アジアの奇跡」の対象国から除外された。その理由は、経済成長と所得不平等の縮小の程度を地域グループ分けするとフィリピンはむしろラテン・アメリカ中所得グループに入るからであろう。

マニラに長期滞在すると異常なまでの「暮らし」や「住まい」の格差を体感することになる。マニラには三つの明確な「住まいの分裂」が見られる。堅牢な壁で保護された高級住宅地区、庶民の住まいが密集する商業地区、そして公有地である線路沿いや河川沿い、その他所有の曖昧な地区などに密集するスラムである。マニラ以外の大都市としてはセブがある。第二の都市セブではマニラのように明確な「住まいの分裂」は見られない。ルソン島最北端からミンダナオ島ダバオまで全ての地方都市には共通の特徴が見られる。先ず農村を後背地とする市・町・村（バランガイ）には「住まいの分裂」が見られない。地方の都市構造は例外なくロータリー広場、役所、教会・聖堂の三点セットで構成され、街道沿いに学校施設と住居や商店街が軒を連ねている。スペイン統治時代の街の原型が現在も残っている。大使館勤務の経験がある通産省ＯＢが三〇年ぶりにマニラを訪問され、三〇年前とマニラが変わっていないと驚かれた。マニラ旧市街地もやはり変容のスピードが非常に緩慢であった。アヤラ財閥が開拓したマカティ地区、サウス・スーパー・ハイウィ沿いの高級住宅地区、日系総合商社が開発した工業団地、エドサ通り等は別として、スペイン統治時代の「暮らし」や「住まい」がフィリピンでは非常に緩慢なスピードでしか変容していないようである。なるほど、世界銀行が「東アジアの奇跡」の対象国からフィリピンを外したことには合点がゆくのである。近代化の過程が都市の再開発や「住まい」様式の急激な変容をもたらすものであるならば、フィリピンの近代化の過程は全国的に緩慢であると言えるかもしれない。

さかい　ひでよし
アジア経済研究所（調査企画室長）、広島市立大学、東北大学を経て現在、新潟県立大学国際地域学部教授
マクロ経済学、進化ゲーム論、情報の経済学の理論に依拠しながら東アジア地域の近代化過程を観察している。